

原 著

Mark Twainによる「ハワイ通信」の編集作業がもたらしたもの
—*Roughing It* のハワイ滞在記におけるユーモアの行方—

Consequences of editing Mark Twain's letters from Hawaii
— A study on humor in the Hawaiian section of *Roughing It* —

平田美千子

要約：Mark Twain 著 *Roughing It* (1872) におけるハワイに関する各章のおよそ3分の2は、1866年に *The Sacramento Union* 紙に掲載され、アメリカ西部読者の人気を博した通信文を編集したものである。しかしながら、オリジナルの通信文と比べると、このハワイ編は、Twain という作家独特のユーモアが十分に発揮されているとは思えない。本稿では、そうした結果を招いた原因は、*Roughing It* の作品構成と語り手であり中心人物でもある「トウェイン」が備える特徴との関わり、通信文と *Roughing It* のそれぞれが書かれた執筆時期に隔たりがあること、通信文の編集方針から生じた変化、ハワイという題材そのものもつ特徴と「トウェイン」が担う役割との関わりなどにあることを指摘している。

Key Words : Mark Twain, Travel Book, Hawaii, Humor, Editing

はじめに

Mark Twain は、作家として活躍する前にアメリカ西部で記者として働いていた頃、当時 the Sandwich Islands と呼ばれていた Hawaii に通信員として赴いた。仕事の第一の目的は、19世紀後半、捕鯨業に代わるアメリカ資本の産業として成長過程にあった砂糖産業の様子を報告することだった (Cf. Kamei 95-96)。Twain は、その任務をこなすかわら、California の読者に彼地の文化や社会事情を知ってもらい、旅行やビジネスの目的地として注目すべき場所として、魅力を伝えることにも力を注いだ (Cf. A. Kaplan, *The Anarchy of Empire* 61)。 *The Sacramento Union* 紙に掲載された通信文¹ は西部読者の人気を博した。ところが、Twain の2番目の旅行記 *Roughing It* (1872) のハワイ編は、約3分の2が *The Sacramento Union* 紙の通信文を利用したものであるのに、オリジナルと比べて Twain 独特のユーモア² が衰えているような印象が拭えない。

実際、*Roughing It* のハワイ編のこれまでの評価は、頁数合わせのために組み入れられたにすぎないと捨ておかれるのが一般的で、あくまで厳しい。たとえば、

Jeffrey Steinbrink は、“the final, desultory procession of Hawaiian chapters” (186) といかにも冷やかかである。Amy Kaplan によれば、Twain にとってのハワイは、南北戦争前の奴隷制を抱えたアメリカ南部へのノスタルジアであると同時に、悲痛な罪悪感を呼び起こすものでもあり、ハワイにおけるアメリカの帝国主義的政策は「アメリカの国民的作家 Mark Twain」を生み出す源泉である (*The Anarchy of Empire* 244-47)。ただし、ハワイ編については、“[Twain] tacked on selections from the letters to the end of *Roughing It* (1872), a section which is less well realized than the rest of the book and never fully incorporated into the Western frontier narrative that precedes it.” (*The Anarchy of Empire* 55) と手厳しい。批評家によっては、ハワイ編については一切触れずに無視してはばからない者もいる。さらには、この本の再版を担当した編集者のなかには、サンドイッチ諸島を取り上げた18の章を西部編にまったく関係がないものとして削除した例もあるという (Cf. Bridgman 55; Cox 86; Day 11; Nakagaki 144)。

Twain は、*Roughing It* の体裁に合わせるために多少の編集作業は加えたものの、1866年に *The Sacramento Union* 紙に書き送った25通の通信文から多くの文章を選んでほぼ原文のまま *Roughing It* に転載した。A.

Grove Dayによると、Twainは9万語からなるオリジナルの通信文から3万語を使用し、新たに約5千語からなる文章を付け足した(Cf. Day 10-11)。実際、部分的に削除したり補足したりした箇所を除けば、第63章から第77章までのハワイ編15章の中でTwainが書き下ろした部分は、以下のとおりである。すなわち、第67章の先住民を教育しようと奮闘するアメリカ人宣教師のエピソード、第70章の「Horace Greeleyとカブ」のトールテール、第75章のKilauea火山の噴火口の底に行った際の様子を描いたレポート、第76章のハワイ島への小旅行、第77章の「嘘つきのMarkiss」のトールテールにほかならない。Twainは、*Roughing It*の執筆には並々ならぬ苦勞をしたようである。というのも、執筆の最終段階に差しかかったとき、出版社との契約上の締切をすでに数ヶ月過ぎており、契約条件にあった頁数を満たすためには、どうしても本の最後の部分に通信文からの文章を加える必要があった。5年も前に書いたものをほぼそのまま使ったために、本としての統一性が欠け、まとまりのない読後感を与えてしまったことは確かである。しかし、成長／成功物語としての自伝と読めなくもない*Roughing It*の終盤にハワイ滞在記を配置した点に注目したい。つまり、西部での辛酸な体験を経たのち、ハワイの通信文とその内容を話題にした全国を回る講演で大成功を取めたTwainの体験からすれば、独自のスタイルを構築した、功なり名をとげた記者としてハワイに渡るといふ本の組み立ては、むしろ妥当と言えなくもない。本論では、今まであまり直接的に取り上げられなかった*Roughing It*が抱えるこうした疑問点について具体的な説明を試みたい。

まずは、*Roughing It*のハワイ編についての問題を3点に分けて考えてみる。ひとつは、*Roughing It*のハワイ編は、作品全体の統一性を乱しているという問題である。西部と呼ばれるMississippi川以西の地域が舞台の旅行編から、極西部と呼ばれるRocky山脈から太平洋岸にかけてのCaliforniaやNevadaなどの州にあたる地域が舞台の記者編へと移り進むにつれて、作中の登場人物である「トウェイン」の特徴が、「イノセント」から経験豊富な人物へと変化しているのに、ハワイ編において、再び「イノセント」の特徴を帯びるようになる。いわば、作品の流れが逆行しているような印象を与えるため、語りにはどこか不自然なものが感じられるということである。2点目は、逆に、作品の統一性を意識したせいで、かえって失敗していると考えられることである。よかれ

と思っておこなった編集そのものが、「トウェインという作家の旅行記」に期待される、生き生きとしたユーモアを生み出す機会を奪ってしまっているのだ。具体的にいうと、オリジナルの文章から意図的に消去された“Mr. Brown”や、当時のハワイの政治や産業のありさまを報告した社会派記事は、Twain独特のユーモアを發揮するうってつけの要素であった。“Mr. Brown”が消去された背景には、Twainは西部のみならず東部を含めた米国全体の読者層を視野に置いていたため、特に東部読者に認めてもらえるように品を保たなければならなかったという事情がある。また、時事的記事の不採用については、*The Sacramento Union*紙に掲載されたハワイの通信文と*Roughing It*自体の執筆時期には、かなりの時間的隔りがあることを考慮に入れなければならない。ハワイ通信の執筆の年は1866年、そこから*Roughing It*の執筆が始まるまでには、ほぼ5年の隔りがあるのだ。さらに3点目として、好評を博した前作の外国旅行記*The Innocents Abroad* (1869)と比べると、*Roughing It*のハワイ編が読者に訴える力に欠けているように感じられるのは、同じ異国・異文化体験記であっても、*The Innocents Abroad*において笑いの対象であったアメリカ人旅行者たちが体験したような、異文化への「幻滅」があまり見られないせいなのだが、それについても検討してみたい。

I.

*Roughing It*はそもそも旅行記というよりは主要登場人物「トウェイン」の成長記であり、*Life on the Mississippi* (1883)の前半の“The Old Times on the Mississippi” (1875)の箇所は例外として、自伝的語りを特徴とする点において、ほかの4つの旅行記と一線を画している。じつは、*Roughing It*の6分の5を占める西部旅行・極西部滞在編では、各エピソードを紹介する語り手「作家トウェイン」と、そこに登場する「かつてのトウェイン」の視点がはっきりと区別されていない。そのため、章が進むにつれて語り手「トウェイン」が変貌をとげているとは言い切れないものの、この作品の大部分を占める西部体験記において、登場人物「トウェイン」は環境に順応して変化しており、終盤には「イノセント」つまり無知な新参者ではなくなっている(Cf. Lynn 167-68)。

一躍全国の読者を獲得した*The Innocents Abroad*では、「イノセントなアメリカ人旅行者トウェイン」の率直な語りや作品にユーモアをはらませる要の役割を果たして

いた。後藤和彦氏は、「前作『赤毛布外遊記』においては、旅そのものがもつニュアンスによってあらかじめ獲得されていた、「アメリカ的イノセンス」をペルソナ「マーク・トウェイン」に付与する方法は、この作品ではより自覚的に、ほとんど露骨とすら言い得る程度にまで採用された」（『迷走の果てのトム・ソーヤー』62）と述べているが、たしかに、*Roughing It* 中の西部旅行編における「トウェイン」は、年齢的な若返りが付加されてはいるが、前作 *The Innocents Abroad* の「トウェイン」の率直な物言いや旅行者の無知ぶりを意味する「イノセント」な特徴をそのまま受け継いでいる。

しかし、*Roughing It* の最大の特徴は、そもそも「アメリカ人旅行者トウェイン」というキャラクターは、どのようにして出来上がったのか、その人物像の完成までの経緯が描かれている点にある³。「東側の人間」、つまり地元民ではないアメリカ人として西部への旅を始めた「トウェイン」は、西部での生活を体験することによって「西部人」になる。ここで言う「東側」とは、*Roughing It* の第2章の旅立ちの場面で、「トウェイン」は、“the States”（*Roughing It* 25; 以下 *RI* と略記する）が後方へと遠ざかる、と語っているが、この“the States”と称される地域のことにほかならない。Twain が兄 Orion とともに西部へ旅立った1861年には、現代の中西部の州の多くが、まだ州とは認められず、準州と呼ばれていた。「トウェイン」にとって、準州は「合衆国」ではない、つまり「東側」と対極にある地域でしかない。そして、西部において時を過ごすうちに、やがて「トウェイン」のなかで東側と西側という自己認識が融合し「アメリカ人」になった人物「トウェイン」が誕生するのである。

しかし *Roughing It* においては、この人物像の誕生は、失敗を経験し成長をとげたことによる「イノセンス」の喪失を意味する。西部体験記の終わりで、記者としても生活者としても熟練者となった「トウェイン」は、もはや「イノセンス」をさらけ出す笑いの対象になり得ない。けれども、ハワイ編に至って、その「トウェイン」が、母国を離れ異国文化と初めて接触するとき、再び作品のなかで外国人旅行者特有のイノセンス「無知の状態」にもどるという設定そのものは、話が面白くなるだろうとの期待を抱かせる。しかし、*Roughing It* を最初から読み進めてきた読者にとっては、西部編の終わりでいったん人間的に成長をとげた「トウェイン」がまたイノセントな特徴を帯びるとは、いかにも不自然である。成長にと

もなって語りの調子も変化してきたというのに、再び作品初期と同様のユーモアを交えて陽気に語る調子に逆戻りするわけにはいかないだろう。このような構成上の齟齬をきたしているせいで、ハワイ編の「トウェイン」には、登場人物としても語り手としても、初めから違和感がつきまとっているのである。

II.

Twain は、*Roughing It* のハワイ編において、オリジナルの通信文を部分的に削除したり、特定の通信文については採用しなかったりする編集作業をおこなっている。その結果、読者の笑いを誘うくんだりや鋭い社会風刺の見られる箇所が大幅に減ってしまった点について取り上げたい。

編集作業でいちばん注目すべきは、Twain が作り出した語り手「トウェイン」の旅の道連れであり、もうひとりの「トウェイン」ともいえるべき“Mr. Brown”を削除したことである。一作目の旅行記 *The Innocents Abroad* において「ブラウン」を取り除いたことは、妥当な編集であったと一般には評価されている（Cf. Cox 42; Kamei 120）。しかし、*Roughing It* において「ブラウン」を消したことの妥当性については、大いに疑問が残る。「ブラウン」の削除によって陽気な笑いを誘うユーモアの利いたくどりをかなり失うことになった（Cf. Caron 463; Sumida 589）。おかげで、*Roughing It* のハワイ編の語りは、先行する部分や元の通信文に比べるとどこか興味が欠け、今ひとつまとまりがよくない。じっさいに Twain が西部で記者をしていたとき、旅行記事のために創造した架空の人物が「ブラウン」なのだが（Cf. F. Kaplan 141）、*Roughing It* の西部編においてはまったく登場せず、言及もなされていない以上、いきなりハワイ編で登場させるわけにはいかなかったのだろう。それに当時の東部の読者は、たとえば、ハワイ通信の第16便で、「トウェイン」と「ブラウン」がハワイ王朝の亡き王女 Victoria Kamamalu Kaahumanu の喪に服する儀式を眺めているという場面で見られる、次のような「ブラウン」の、およそ上品とは言いがたい、歯に衣着せぬ率直な物言いに拒否反応を示したであろうと思われる。

A dozen men performed next—howled and distorted their bodies and flung their arms fiercely about, like very maniacs. “God bless my soul, just listen at that racket! Your opinion is your opinion, and I don’t quarrel with it; and my opinion is my

opinion; and I say, once for all, that if I was Mayor of this town I would just get up here and read the Riot Act once, if I died for it the next—" "Brown, I cannot allow this language. These touching expressions of mourning were instituted by the good bishop, who has come from his English home to teach this poor benighted race to follow the example and imitate the sinless ways of the Redeemer, and did not he mourn for the dead Lazarus? Do not the sacred scriptures say 'Jesus wept' "? (*Letters from Hawaii* 166)

しかし、第19便や第21便にも描かれている俗物的気取りを上品と見せかけた「トウェイン」と、見るからに遠慮のない口を利く西部男「ブラウン」の会話は、対照的なかたちに誇張されていて興味深い。また、ハワイ通信で紹介されるふたりの珍道中においては、無知が原因の幻滅と失敗のエピソードが面白おかしく表現されている。したがって、そうした逸話をすべて削除した影響は、相当あるものと考えられる。さらにいうと、*Roughing It* の西部編の終盤で記者として成熟してゆく様子が描かれたあと、「トウェイン」がとってつけたようなイノセントぶりを見せるよりは、多少の違和感があったとしても、ハワイ編でも「ブラウン」を再登場させ、奔放なイノセントの役割をふっておいたほうが、まだしもいいのではないかとまで思わせられるのである。

「ブラウン」消去に伴う笑いの喪失を埋め合わせるために加筆されたと考えられるのが、宣教師たちと地元民のエピソードや、「Horace Greeley とカブ」、「嘘つきの Markiss」のトールテールにほかならない。その中で、イノセントなアメリカ人たちを描いた「カブ」と「Markiss」の2つの小話は、導入の仕方がいかにも唐突で、一体なぜ作品のそのくだりにそんな話が出てくるのか、前後のつじつまが合わない。単独で読めば、それぞれ Twain のユーモアのセンスと文章力がよく表れた作品として評価できるが、*Roughing It* 全体の中に置いてみると、単なるページ水増しのために入れられたのではないかと勘ぐりたくなる。A. Grove Day は、"[t]he shorter, later version of the Hawaiian adventures in *Roughing It* is smoothly written and artfully told" (11) と述べているが、実際は文章を削ってつなぎ合わせただけの部分が目につく *Roughing It* のハワイ編をそんなふうに褒めていいものかと首を傾げざるをえないのである。

III.

もうひとつ、ハワイ通信の編集作業がもたらしたマイナスの効果と考えられる点は、オリジナルの通信文において作家 Twain の記者的視点と文章力が活かしている報告や社会批評が、ほとんど *Roughing It* には採用されていないことである。ハワイ諸島の砂糖、オレンジ、捕鯨などの産業やアメリカとの貿易事業、ハワイ—アメリカ間の蒸気船交通網や、アメリカ長老派の宣教師団と英国国教会の対立に象徴される、宣教活動をめぐる西欧諸国との競争といった話題は、ハワイ通信の執筆から五年以上の月日が経っていることを考えれば、*Roughing It* への転載採用が見合わせられたのは無理もないといえる。これらの話題を再び取り上げようと思えば、1871年当時の実状を再調査する必要が生じたはずだが、現実にはそのような時間的余裕はなかった (Cf. Steinbrink 186-87)。

ハワイの王族、歴史、宗教、そして政治、とくにハワイ議会の実態に関する示唆に富んだ詳しい報告や論評も *Roughing It* には採用されていない。これらの話題に「ブラウン」が登場するわけではないが、社会批評の盛り込まれた通信文には、記者の鋭い洞察力ばかりでなく、スパイスの利いた風刺がなされている。つまり、そこには記者 Twain の、皮肉と風刺を駆使した生き生きとしたユーモアのセンスが際立っているのである。したがって、*Roughing It* の西部旅行編や極西部記者編で見られた、ナンセンスな爆笑を引き起こす機会はないけれど十分に読む価値がある。

Roughing It のハワイ編に社会批評的な文章がまったくないわけではない。西部編で完成を見た、東部と西部の融合した「アメリカ人」の視点から、ハワイ諸島の風俗や習慣について描写しているところは少なくない。しかし、そうしたくだりは概して批評と呼べるほど深い議論にはなっていない。唯一、好例として挙げられるのは、アメリカ人宣教師たちと原住民との関係について語られた文章と、「Captain Cook」[James Cook (1728-79)] についての歴史的考察くらいのものである。

じつは、Twain は、著作の中で初めて西欧諸国の帝国主義的政策について言及し、母国アメリカも潜在的に無関係ではないと正直な意見を述べている。*Roughing It* において語り手「トウェイン」がアメリカ人宣教師のことを取り上げるとき、すでに宣教師たちの仕事をもつ二面性を認識していた。キリスト教もしくはプロテスタンティズム、民主主義や近代化という概念を基にした当時

の米国社会に見られた一般的な良心や倫理観は、他の文化圏の人々によって必ずしも同等の価値を認められるようになるわけではない。「トウェイン」は、

[T]he missionaries braved a thousand privations to come and make [the natives] permanently miserable by telling them how beautiful and how blissful a place heaven is, and how nearly impossible it is to get there; and showed the poor native how dreary a place perdition is [. . .]; showed him what rapture it is to work all day long for fifty cents to buy food for next day with, as compared with fishing for pastime and lolling in the shade through eternal Summer, and eating of the bounty that nobody labored to provide but Nature. How sad it is to think of the multitudes who have gone to their graves in this beautiful island and never knew there was a hell! (RI 463)

と語っている。もともと先住民になかった「天国と地獄」の概念や「わずかな金のために汗水たらして働くことの尊さ」の概念の導入は、先住民に言わせれば余計なおせっかいであり、むしろ持ち込まれなかったほうがよかったであろうことを示唆するのである。しかしながら、語り手自身も、民主主義や近代化など、宣教師たちと似たような価値観を多かれ少なかれ共有しており、以下のとおりに語っている。

The King and the chiefs ruled the common herd with a rod of iron; made them gather all the provisions the masters needed; build all the houses and temples; stand all the expenses, of whatever kind; take kicks and cuffs for thanks; drag out lives well flavored with misery, and then suffer death for trifling offenses or yield up their lives on the sacrificial altars to purchase favors from the gods for their hard rulers. The missionaries have clothed them, educated them, broken up the tyrannous authority of their chiefs, and given them freedom and the right to enjoy whatever their hands and brains produce with equal laws for all, and punishment for all alike who transgress them. The contrast is so strong—the benefit conferred upon this people by the missionaries is so prominent, so palpable and so unquestionable [. . .]. (RI 464)

このように、宣教師のハワイでの仕事を完全に否定す

ることはできない。ただし、ここで語り手「トウェイン」は、ハワイ諸島の先住民には宣教師による教育が不可欠なのだとは主張したいわけではない。ただ、アメリカ人宣教師たちの努力の結果、現地の文化や社会に明らかな変化が認められ始めていたことを、この時期の作家活動の中で報告している事実が残っているのだ。

さらに、Twainは、ハワイの伝統的民族舞踊のフラダンスを取り上げ、“lascivious” (RI 476) という形容詞を使い、みずからの西欧的価値観に立った捉え方をしているが、その一方で、フラダンスは、ハワイ諸島に連綿と受け継がれてきた、敬意を表すべき伝統芸術文化の一つであるとの見方も示している。当時、Twainが目当たりとしたフラダンスは、西欧文明の倫理観の目にさらされ衰退の経路をたどりつつあった。「トウェイン」は、“The demoralizing *hula hula* was forbidden to be performed, save at night, with closed doors, in presence of few spectators, and only by permission duly procured from the authorities and the payment of ten dollars for the same. There are few girls now-a-days able to dance this ancient national dance in the highest perfection of the art.” (RI 477) と記している。けれど、それ以上は深入りしていない。ある地域社会に外来の価値概念が持ち込まれると、伝統文化や芸術がいかに深甚なる打撃を受けるかを示唆するにとどまっているのである。

さて、宣教師がもたらした負の影響を提示したあと、「トウェイン」は、以下のとおり彼らの功績にも言及している。“The missionaries have christianized and educated all the natives. [. . .] [T]here is not one of them, above the age of eight years, but can read and write with facility in the native tongue. It is the most universally educated race of people outside of China.” (RI 477)、また、宣教師が、旧独裁制下で不当な扱いを受けていた女性の政治的、社会的立場の向上に貢献したことや、“a romantic fashion of burying some of their children alive when the family became larger than necessary” (RI 482) という口減らしのための反人道的な習慣をやめさせたことを紹介し、宣教師が果たした貢献の例をあげている。亀井俊介氏は、この点について、「キリスト教についても（中略）その弊害を述べながら、同時に、昔の野蛮な迷信や残虐行為がなくなったということで、宣教師が果たした役割も十分に認めている—いやむしろ、その方を強調している」（100）と指摘している。

先住民の社会風習や生活習慣を変えようとする宣教師たちの試みは、いつも成功するとは限らないことは言うまでもない。長い歴史のあいだに培われた人々の信念や習慣を変えることは容易ではないと思知らされることも、少なくないのである。予想とは裏腹に、キリスト教が先住民の精神に根づかないのは、土着信仰の神にたいする偶像崇拜が骨身に深くしみこんでいる (RI 483) ため、一朝一夕に片づく問題ではなかった。また、教会の礼拝にやって来る彼らに西欧式服装を広めようとしても、“the fantastic assemblage,” “wholly unconscious of any absurdity in their appearance” (RI 485, 486) を作り出す羽目になってしまった。つまり、かえって身なりがひどくなる結果を招いたのである。そのように、努力が無に帰することも珍しいことではなかった。Twain は、*Roughing It* において、はっきりと宣教師の働きの是非を述べてはいない。次に同じような問題を直接的に取り上げるのは、最後の旅行記 *Following the Equator* (1897) の中で、インドにおける大英帝国の植民地支配について所見を述べる時である。

一方で、大航海時代以来の多くの「発見者たち」の一人に名を連ねる James Cook について、Twain ははっきりとした判断を下している。Cook がハワイ諸島の先住民にたいしておこなった尊大な振る舞いを痛烈に皮肉り、“Small blame should attach to the natives for the killing of Cook. They treated him well. In return, he abused them.” (RI 515) と Cook の死の原因については、Cook 側に非があったことを指摘している。そうした姿勢は、以後も変わることがなく、*Following the Equator* のオーストラレーシア編において見られる、白人によるアボリジニーに対する迫害や、南アフリカでくり広げられていた植民地化についての容赦のない批判につながっていくのである。

IV.

最後にもうひとつ、これは前作の外国旅行記 *The Innocents Abroad* において何度もくり返されたことなのだが、外国人旅行者が本で得た予備知識により、勝手につのらせた異文化にたいする過剰なあこがれや期待が裏切られ、「幻滅」にいたるおかしさを描く場面は、*Roughing It* のハワイ編では、ほとんど見られないことも忘れてはならない。

語り手「トウェイン」の異国情緒にあふれる楽園をめぐる甘い幻想は、島のどこへ行っても押し寄せてく

るありとあらゆる種類の虫や、Kanakas と呼ばれる Polynesia 土着民の風習があまりにも異色なので仰天したりすることで、しばしば破られる憂き目にあう。また、「トウェイン」はたびたび食文化の違いに注目し、時として次のように、不衛生に見える珍しい食習慣を酷評している。“Many a different finger goes into the same bowl and many a different kind of dirt and shade and quality of flavor is added to the virtues of its contents” (RI 475) ; “the native is very fond of fish, and *eats the article raw and alive!* Let us change the subject.” (RI 476) カナカ人の主食、ポイは、「トウェイン」の文化的価値観からすると食べ方が特異すぎて耐え難い。魚の活け造りを食べる習慣もまた同じである。さらに、遺体を30日間も宮殿内に安置しておくという王族の葬儀にまつわる習慣や、遺体安置の間と葬儀の間でおこなわれる一連の嘆きのしきたりの様子は、アメリカ的価値観にとっては、とうてい理解しえないものであった。「トウェイン」は、後者について以下のとおり、語り伝えている。“[A] pandemonium every night with their howlings and wailings, beating of tom-toms and dancing of the (at other times) forbidden ‘hula-hula’ by half-clad maidens to the music of songs of questionable decency chanted in honor of the deceased.” (RI 490)

このように多少カルチャーショックを受けたことはまちがいないが、語り手「トウェイン」は、おおむね文化の違いに興味を示し、見聞を楽しんでいる。それゆえに、Fred Kaplan が “On the whole Hawaii was one of the few places in the world that did not disappoint him.” (143) と指摘しているように、*The Innocents Abroad* において見られたような身勝手な失望や、ときには怒り出すことになる異文化にたいする極端な幻滅は、ハワイ編の中ではほとんど認められないのである。ハワイ諸島の素晴らしい景色をただ素晴らしいとして描写し、ひねりを入れようとしなない「トウェイン」は、ふつうに旅行を楽しむために出かけた旅行者が、期待どおりのものを見、体験を味わっているような印象を受ける (Cf. F. Kaplan 140-43)。加えて、*Roughing It* の西部編の前半のように、「トウェイン」が、自己が無知なせいで失敗をしたり、現地人にやりこめられたりする場面はほとんど見られない⁴。逆に、自己が無知にもかかわらず開き直り、現地の人々や事物にたいして不遜な態度を示すこともあまりない。大きな幻滅にも失敗にも出会わないため、語りにメリハリを持たせる笑いが入る余地がなく、調子が変化

に乏しい傾向は避けられない。おかげで、ハワイ編においては、西部編の前半で見られた爆笑を誘うような場面は現れないのである。

おわりに

最後に余談になるが、Twainは、*Roughing It*の後半に組み入れられたハワイ編と補遺については、単なる増ページを狙ったもので本全体の統一性を損なうとの批判は免れないだろうと考えていたようだ。第78章の逸話は、この作品の執筆を終えたばかりの作者自身が、批評家の目や売れゆきについて心配している様子を描いたものと見られるのである。ところが現実には、Twainの懸念は杞憂に終わり、*Roughing It*の売れ行きは上々だった。書評も概して好意的で、William Dean Howellsなどの権威ある作家の後押しもあり、厳しい批評をするものは少数だったのである。(Cf. Wonham 11-12)

Notes

- ¹ Twainの死後にA. Grove Dayによってまとめられ、*Mark Twain's Letters from Hawaii* (1866)として出版された。
- ² Twain独特のユーモアとは、笑いを最終目的にした西部的ユーモアの形式と社会風刺をうまく取り込んだもので、東部にも通用する話題を扱っているところに特徴がある。Pascal Covici, Jr.は、*The Routledge Encyclopedia of Mark Twain*の“Humor”の項で、“Twain made at least three striking contributions to the development of American humor: he moved the source laughter from an essentially eighteenth-century mode to a modernist perspective; he participated in altering the feelings of readers toward vernacular characters, changing those feelings from distantly bemused superiority to sympathetic identification; and he transformed the hoax from a laughter-producing gadget to a mechanism for presenting the world, and all life itself” (377)と説明している。
- ³ この点について、後藤氏は次のように指摘している。「無垢なものの造形は、「マーク・トウェイン」というひとつの文学的現象の核心にあったと見てもよい。というのは、最初期の旅行記『赤毛布外遊記』以来、あるいはそれより以前に書かれた『マーク・トウェインのハワイ通信』以来といってもよいが、『苦難を忍びて』、「ミシシッピー川の昔」と続けざまに出されたノンフィクション群の眼目のひとつは、サム・クレメンズが南北戦争中に見出した「マーク・トウェイン」というペルソナの構築にあっ

たからだ。西部的な、あるいはアメリカ的な自由とおおらかさ、純真さ、正義感、抜け目なく振る舞うように見えて最後は失敗してしまう人の良さ、虚飾を廃した率直な話し方、書き方、これらがひとつになってこの宿命のペルソナはできあがっていった。たとえば『苦難を忍びて』について、「マーク・トウェイン」という人格は西部ネヴァダにおいて誕生するのだから、この極西部探訪の記を「トウェイン」誕生秘話と呼ぶこともできる。」(「序説」52; Cf.『迷走の果てのトム・ソーヤー』63)

- ⁴ 第65章において、買った馬に欠陥があることがあとで分かったというエピソードがあるが、それ以外では「現地人にかつがれる」というシチュエーションは見られない。

Works Cited

- Bridgman, Richard. *Traveling in Mark Twain*. Berkeley: U of California P, 1987.
- Caron, James E. “*Letters from the Sandwich Islands* (1866).” *The Routledge Encyclopedia of Mark Twain*. Eds. J. R. LeMaster and James D. Wilson. New York: Routledge, 2011. 463-64.
- Covici, Jr., Pascal. “Humor.” *The Routledge Encyclopedia of Mark Twain*. Eds. J. R. LeMaster and James D. Wilson. New York: Routledge, 2011. 377-80.
- Cox, James M. *Mark Twain: The Fate of Humor*. Princeton: Princeton UP, 1966.
- Day, A. Grove. Introduction. *Mark Twain's Letters from Hawaii*. 1866. By Mark Twain. Ed. A. Grove Day. Honolulu: U of Honolulu P, 1975.
- Goto, Kazuhiko (後藤和彦). 「マーク・トウェインの著作:序説」『マーク・トウェイン文学／文化事典』亀井俊介監修 東京: 彩流社, 2010. 44-55.
- . 『迷走の果てのトム・ソーヤー: 小説家マーク・トウェインの軌跡』東京: 松柏社, 2000.
- Kamei, Shunsuke (亀井俊介). 『マーク・トウェインの世界』東京: 南雲堂, 1995.
- Kaplan, Amy. *The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture*. Cambridge: Harvard UP, 2005.
- . “Imperial Triangles: Mark Twain's Foreign Affairs.” *MFS Modern Fiction Studies* 43 (1997): 237-48.
- Kaplan, Fred. *The Singular Mark Twain: A Biography*. New York: Doubleday, 2003.
- Lynn, Kenneth S. *Mark Twain and Southwestern Humor*. Boston: Atlantic Monthly P, 1959.
- Melton, Jeffrey Alan. *Mark Twain, Travel Books, and Tourism: The*

Tide of a Great Popular Movement. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2002.

Nakagaki, Kotaro (中垣恒太郎). 「『苦難をしのびて』マーク・トウェイン」『アメリカの旅の文学：ワンダーの世界を歩く』亀井俊介編著. 東京：昭和堂, 2009.

Steinbrink, Jeffrey. *Getting to Be Mark Twain.* Berkeley: U of California P, 1991.

Sumida, Stephen H. "Reevaluating Mark Twain's Novel of Hawaii." *American Literature* 61 (1989) : 586-609.

Twain, Mark. *Following the Equator.* 1897. Ed. Shelley Fisher Fishkin. *The Oxford Mark Twain.* New York: Oxford UP, 1996.

---. *The Innocents Abroad.* 1869. Ed. Shelley Fisher Fishkin. *The Oxford Mark Twain.* New York: Oxford UP, 1996.

---. *Mark Twain's Letters from Hawaii.* 1866. Ed. A. Grove Day. Honolulu: U of Hawaii P, 1975.

---. *Roughing It.* 1872. Ed. Shelley Fisher Fishkin. *The Oxford Mark Twain.* New York: Oxford UP, 1996.

Wonham, Henry B. Afterword. *Roughing It.* 1872. By Mark Twain. Ed. Shelley Fisher Fishkin. *The Oxford Mark Twain.* New York: Oxford UP, 1996. i-xvii.